

大学進学の原因が大学適応感とキャリア発達に及ぼす影響 —不登校傾向の高い生徒の援助への提言—

(平成29年11月27日 受理)

人文社会系 佐藤 友美

米光 真由美 (西日本工業大学)

Influence of student's reasons for entrance into university on university adjustment and career development: Proposal on support for students having a tendency towards non-attendance at school

(Received November 27, 2017)

Kyushu Institute of Technology Tomomi SATO

Nishinippon Institute of Technology Mayumi YONEMITSU

Students who tended to be absent at high-school are more likely to dropout from university and less able to develop career skills. Educational psychological findings suggest that fostering autonomous motivation to entrance is effective for high-school students to well-future adjustment to university. For testing the possibility, this study investigated which type of entrance motivation led to well-adjustment and career adaptability at university. One hundred sixty-three university freshmen answered self-reported questionnaire on the reasons for entrance, subjective adjustment to university, and career adaptability. The results revealed that the degree of study-orientation and that of academic ability respectively had positive and negative correlation to both university-adjustment and higher career adaptability. The extracurricular activities oriented reason, which is the other type of autonomous reason, had no relation to both university-adjustment and career adaptability. It would be therefore to foster study-orientation motivation of high-school students before entrance, preventing from their future-maladjustment to university.

問題と目的

高校生の卒業後の進路選択は、大きく就職と進学という選択肢が存在する。文部科学省(2012)の平成24年度学校基本調査によれば、高校卒業後、約7割の生徒が大学や専修学校などへ進学している。また、文部科学省(2006)の不登校に関する実態調査によ

れば、過去に不登校の経験があった者で大学・短大・高専への就学している割合は、平成13年の8.5%に比べて平成18年度は22.8%に増加しているという。このことから、現在の不登校の経験があった者の大学進学は、より増加していることが予測されるが、まだその比率は十分に高いとはいえない。

大学進学はこれまでの進学とは異なり、大学卒業後の職業という、自分が経験したことのない職業に就くということを想定し取り組まなければならない、これまで経験したことのない課題を前に不安や迷いも大きいという(成田・森田, 2015)。さらに、教育内容、学生サービス、卒業後の進路選択の可能性など、多くの不確定な情報の中で、進学先の決定など進路の選択・決定を迫られている状況となっている(五十嵐・佐藤, 2011)。さらに、このような高校から大学への移行は、学校段階の移行という変化だけでなく、心理社会的な発達過程として青年期のさまざまな課題に直面することとなる(五十嵐・佐藤, 2011)。つまり、高校から大学への進学においては、これまでの移行にも増して進路決定においてキャリア意識を強く持ち、進路決定のスキルを利用しなければならない。しかし不登校傾向の高いものは、進路成熟度が低く(松井, 2002)、進路意識が低く(田山, 2008)、進路決定スキルが低い(五十嵐, 2011)という。そのため、不登校傾向の高い者にとって高校卒業後の進路決定を行うことは困難であり、進路選択行動を十分に援助する必要がある。

大学進学が決定してからも、大学継続が次の課題となる。牧野(2001)は、国立大学生、私立大学生計114名の調査から、57.0%の大学生がかなりの頻度で学校に行きたくないと思っており、58.8%の学生が1度でも大学を辞めたいと思ったことがあると報告している。さらに、濱名(2005)は、高校時代の経験と大学入学後の適応状態の関係を検討し、大学での適応を促進しているのは、高校における、授業の充実・学習の順調さ・人間関係の3要素であることが示されている。つまり、不登校の経験があった者は、大学での適応においてリスクを抱えているといえよう。そのため、不登校を乗り越えて大学へ進学しても、大学で不適応となり大学継続も難しくなる可能性がある。

さらに大学での大きな課題として、次の社会人への移行に向けて、キャリア意識を発達させていくことが挙げられる。キャリア意識の発達について縦断的に検討したLow, Yoon, Roberts, & Rounds(2005)によると、キャリア意識は思春期青年期を通して不変であり、大学就学時に最も高くなっていき、その後20年にわたり維持されるという。つまり、大学卒業後の適応的なキャリア形成のためには、大学在学中に十分にキャリア意識を向上する必要がある、このキャリア意識の向上のためには大学入学時にある程度のキャリア意識を持っていることが重要であるといえる。しかし先述した通り、不登校傾向の高い者のキャリア意識は低いことから、大学以降のキャリア形成においても問題を抱え続ける可能性が示唆される。実際、1、2年と何とか大学生活を送ることができ

ても、就職といった卒業後の進路の問題に直面した時点で、大学生活の継続が難しくなるケースは多く見られる。

したがって、不登校の経験があった者や不登校傾向の高い高校生に対しては、単に大学進学へ導くのではなく、大学への適応やその後の適応的なキャリア形成を考慮した進路選択への援助が重要である。それではどのような進路選択が、大学適応やキャリア発達に有効なのであろうか。この点を明らかにすることで、不登校傾向が強かったり不登校経験がある者に対する支援の、具体的な方向性を探ることが可能になると考えられる。そこでまず本研究では、不登校経験にかかわらず、どのように大学進学を決定することが大学での適応感や適応的なキャリア形成につながるのかを明らかにすることで、支援の方向性に関する示唆を得ることを目的とする。

大学への進路選択に関しては、大学進学の原因 (e.g., 舘上, 1984; 八木・齊藤・牟田, 2000) や、進路決定において考慮する条件 (e.g., 吉中, 1994), 大学進学の原因の流れ (e.g., 栗山・上市・齊藤・楠見, 2001) などから明らかにされている。中でも学力不足で、進路不明に対する悩みの高いものは、学力重視の進学原因をとる (鈴木・柳井, 1993) ことや、生活そのものに対して消極的なものは進路の方向性が曖昧で、また世間体を重視していることが明らかになっている (五十嵐・佐藤, 2011)。不登校傾向が高い生徒は、学力不足に対する悩みが高い (伊藤, 2015)。また生活に対して消極的にならざるを得ない (松井・笠井, 2012)。したがって、不登校傾向の高い生徒は、大学進学を選択する際学力重視で世間体を重視するという特徴が示唆される。

それでは、このような原因をもとに大学に進学することは、大学適応やその後のキャリア発達にどのような影響を及ぼすのであろうか。また、どのような大学進学原因を持って大学進学をすれば、大学での適応やその後の適応的なキャリア形成につながるのだろうか。

大学進学の原因に関する先行研究は散見されるが、三保・清水 (2011) はこれまでの大学進学の原因の研究を概観し、先行研究の因子を整理した。その結果、「大学の教育的機能 (本来的機能・副次的機能)」と「原因づけ (自律的あるいは内発的・他律的あるいは外発的)」の2次元の枠組みがあるとし、4つの象限に位置づけられるとした。第1象限として、大学での本来的機能である学習に対して自律的・意欲的に取り組んでいこうとする「勉強志向」、第2象限として、自律的ではあるが課外活動 (クラブ・サークル活動) といった大学の副次的機能や自由に遊ぶ時間を重視する「正課外活動重視」、第3象限として受験ランクや学力を考慮しての進学、無目的の進学など、受験による選抜という大学の副次的機能を意識し、他律的な「受験ランク」、そして第4象限として大学がもつ対外的、社会的評価といった大学が外から受ける評価を意識している「周囲の評価」である。三保・清水 (2011) は、この4つの象限から「大学進学原因」尺度を

構成した。本研究では、先行研究を概観して作成された本尺度を使用し、大学進学動機を測るのが適切であると考えられる。これまで、高校進学においては自律的な進路選択はその後の適応を予測し、自律性の低い進路選択はその後の不適応を予測することが示されてきた(永作・新井, 2005)。したがって、大学進学においても自律的な進路選択、つまり「勉学志向」と「正課外活動重視」による大学進学理由が高い学生は、大学への適応感も高いと予測される。一方、自律性の低い、他律的な進路選択、つまり「受験ランク」と「周囲の評価」による大学進学理由が高い学生は、大学への適応感が低いと予測される。大学への適応感としては、大久保・青柳(2003)の大学環境への適応感尺度を使用する。本尺度は、大学生生活に対して多様な意味づけを行っていると考えられる近年の大学生を考慮し、学業への適応感に限らず大学生生活に対する様々な主観的な意味づけを考慮したものである。したがって、近年の大学生の多様な適応感を測るのには適切であると考えられる。

またキャリア意識においては、これまでのキャリアに関わる決定や行動とキャリア意識とが関連していることが示されている(山本, 1994)。したがって、自律的な進路選択、つまり「勉学志向」と「正課外活動重視」による大学進学理由が高い学生は、キャリア意識が高いと考えられる。一方、他律的な進路選択、つまり「受験ランク」と「周囲の評価」による大学進学理由が高い学生は、キャリア意識が低いと予測される。キャリア意識としては、キャリア・アダプタビリティ尺度(杉本, 2014)を使用することとした。キャリア・アダプタビリティは、青年期のキャリア発達理論の中核であったキャリア成熟に代わる概念として、Savickas(1997)が提唱したものである。キャリア・アダプタビリティとは、予測できる状況への対応の熟達ではなく、キャリアを形成する上で起こる環境の変化や新たな状況に対応するレジリエンスの程度である。この程度が高いほど、適応的なキャリア形成につながると考えられる。

方法

調査参加者

理系学部72名($Mage = 18.82, SD = 0.68$)と文系学部91名($Mage = 18.59, SD = 0.56$)に所属する大学1年生を対象とした。

調査時期と手続き

2017年11月初旬に授業開始時に配布した。回収後、デブリーフィングを行った。

調査内容

大学進学理由 三保・清水(2011)の作成した「大学進学理由尺度」を用いた。この尺度は専門知識を深めたいからといった「勉学志向」、周囲の人が勧めるからといった「周

囲の評価」, 大学で遊びたいからといった「正課外活動重視」, そして入試の難易度を考慮したからといった「受験ランク」の4因子からなっている尺度である。「以下の39項目は, あなたが大学に進学した理由として, どの程度あてはまりますか?」と教示し, 各項目に「1. あてはまらない」「2. どちらかといえばあてはまらない」「3. どちらかといえばあてはまる」「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

大学への適応感 大久保・青柳 (2003) の作成した「大学環境への適応感尺度」を用いた。この尺度は, 周囲に溶け込んでいるといった「居心地の良さの感覚」, 他人から頼られていると感じるといった「被信頼・受容感」, 熱中できることがあるといった「課題・目的の存在」, その状況で嫌われていると感じる (逆転項目) といった「拒絶感のなさ」の4因子から構成されている。「次の1から29について, 自分の大学生活においてそれぞれあてはまると思う番号に○印をつけてください。」と教示し, 各項目に「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. どちらでもない」「4. あてはまる」「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。

キャリア・アダプタビリティ 杉本 (2014) が作成した, キャリア・アダプタビリティ尺度 (29項目, 5件法) を使用した。本尺度は今の選択が自分の将来を形成すると認識することといった「関心」, 前向きでいることといった「コントロール」, 自分の持っている疑問について深く調べることといった「好奇心」, そして自分自身に期待することといった「自信」の4因子から構成されている。「人は異なる強みを用いてキャリア (人生) を構築していきます。全てが得意だという人は誰もいません。強みとして重要視していることは人によって異なります。以下の項目について, あなたはどれほど発達させ, できるようになっていますか。」と教示し, 「1. 全くできない」「2. いくらかできる」「3. できる」「4. とてもできる」「5. 非常によくできる」までの5件法で回答が求められた。

結果

大学進学理由と大学への適応感およびキャリア・アダプタビリティの関連

大学進学理由, 大学への適応感, キャリア・アダプタビリティの, 各下位尺度の平均値, 標準偏差, およびCronbachの α 係数は表1のとおりである。まず, 大学への進学理由と大学への適応感, キャリア・アダプタビリティの関係性を明らかにするため, 相関分析を行った (表-1上部)。その結果, 大学進学理由の「周囲の評価」は「居心地の良さ」と正の相関の傾向, 「受験ランク」は「被信頼感・受容感」と負の相関, 「正課外重視」は「居心地の良さ」と「被信頼感・受容感」と正の相関, そして「勉学志向」は大学への適応感のすべての下位尺度と正の相関が見られた。このことから, 大学進学理由はその後の大学生活における適応感と関連があることが示された。また, 「周囲の評価」

表-1 大学進学理由、大学への適応感、キャリア・アダプタビリティの相関および重回帰分析結果

	大学進学理由				大学への適応感				キャリア・アダプタビリティ			
	周囲の評価	受験ランク	正課外重視	勉学志向	居心地の良さ	被信頼感・受容感	拒絶感のなさ	課題・目的の存在	関心	コントロール	好奇心	自信
周囲の評価	—	0.30 ***	0.53 ***	0.32 ***	0.15 †	0.12	-0.09	0.07	0.09	0.09	-0.01	0.05
受験ランク	0.30 ***	—	0.24 **	-0.12	-0.07	-0.18 *	-0.04	-0.03	-0.37 ***	-0.22 **	-0.21 **	-0.23 **
正課外重視	0.53 ***	0.24 **	—	0.21 **	0.22 **	0.16 *	-0.05	0.09	0.03	0.07	0.03	0.04
勉学志向	0.32 ***	-0.12	0.21 **	—	0.24 **	0.31 ***	0.14 †	0.25 **	0.38 ***	0.27 ***	0.22 **	0.16 *
周囲の評価					.02	.03	-.15	-.06	.09	.02	-.10	.04
受験ランク					-.11	-.19 *	.03	-.02	-.38 ***	-.28 **	-.25 **	-.28 **
正課外重視					.20	.13	-.02	.09	.03	.13	.14	.09
勉学志向					.18 *	.25 *	.19	.25	.30 ***	.21 **	.20 *	.09
学部					-.02 *	.00	-.01	-.08	-.08	-.23 **	-.25 **	-.13
R ²					.07 **	.11 ***	.01	.04 *	.24 ***	.13 ***	.11 ***	.06 *
平均値	3.64	3.34	3.80	3.63	3.13	3.08	3.09	3.06	2.13	2.51	2.23	3.04
標準偏差	0.62	0.69	0.65	0.71	0.94	0.91	0.84	0.75	0.61	0.68	0.72	0.66
α	.83	.79	.92	.88	.89	.81	.88	.78	.86	.77	.80	.79

Note. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

および「正課外重視」とキャリア・アダプタビリティとは関連が見られなかったが、「受験ランク」はキャリア・アダプタビリティのすべての下位尺度と負の相関が見られた。一方、「勉学志向」はキャリア・アダプタビリティのすべての下位尺度と正の相関が見られた。このことから、大学進学理由はキャリア・アダプタビリティとも関連があることが示された。

大学への適応感への予測

次に、大学への適応感を目的変数とし、大学進学理由および理系・文系学部を説明変数とした重回帰分析を行った(表-1下部)。その結果、「居心地の良さの感覚」は、「勉学志向」から正のパス、「学部」から負のパスが見られた。「被信頼感・受容感」は、「受験ランク」から負のパス、「勉学志向」から正のパスが見られた。しかし、「拒絶感のなさ」と「課題・目的の存在」を説明するパスはみられなかった。

キャリア・アダプタビリティへの予測

次に、キャリア・アダプタビリティを目的変数とし、大学進学理由および理系・文系学部を説明変数とした重回帰分析を行った(表-1下部)。その結果、「関心」は「受験ランク」から負のパス、「勉学志向」から正のパスが見られた。「コントロール」は「受験ランク」から負のパス、「勉学志向」から正のパス、「学部」から負のパスが見られた。「好奇心」は「受験ランク」から負のパス、「勉学志向」から正のパス、「学部」から負のパスが見られた。「自信」は「受験ランク」から負のパスが見られた。

大学進学理由の個人差の検討

次に、大学進学理由の個人差をより明確に検討するため、大学進学理由の4因子の高低によって特徴的なパターンを見出し、パターンごとに大学への適応感の違いおよび

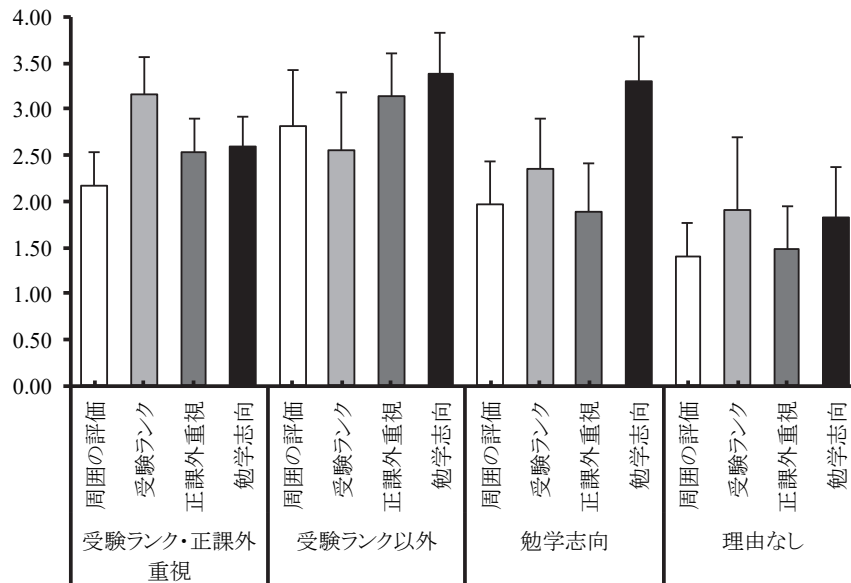


図-1 各クラスターの大学進学理由の平均点 (エラーバーは標準偏差)

キャリア・アダプタビリティの違いが見られるかを検討した。まず、大学進学理由についてクラスター分析 (ward法) を行った結果、解釈可能性から4つのクラスターに分類することができた (図-1)。

各下位尺度得点の特徴から、受験ランクと正課外重視得点が高かったが他は高くはなかった「受験ランク・正課外重視」、受験ランク以外が高かった「受験ランク以外」、勉学志向が高かった「勉学志向」、そしてどの理由も低かった「理由なし」とそれぞれ解釈を行った。そのうえで、大学への適応感およびキャリア・アダプタビリティの下位尺度得点それぞれを従属変数とした分散分析を行った (表-2)。

表-2 大学進学理由クラスターごとの平均値 (標準偏差) および分散分析結果

		受験ランク・正課外重視 n = 34	受験ランク以外 n = 32	勉学志向 n = 82	理由なし n = 15	F
大学進学理由	周囲の評価	2.17 (0.36)	2.82 (0.59)	1.97 (0.46)	1.40 (0.36)	
	受験ランク	3.16 (0.41)	2.55 (0.63)	2.34 (0.56)	1.90 (0.79)	
	正課外重視	2.53 (0.37)	3.14 (0.47)	1.90 (0.52)	1.48 (0.45)	
	勉学志向	2.60 (0.32)	3.39 (0.45)	3.31 (0.48)	1.82 (0.55)	
大学への適応感	居心地の良さ	3.59 (0.59)	3.80 (0.69)	3.65 (0.58)	3.36 (0.68)	1.83
	被信頼感・受容感	3.15 (0.51)	3.43 (0.66)	3.44 (0.70)	2.98 (0.88)	3.08 *
	拒絶感のなさ	3.80 (0.65)	3.63 (0.67)	3.87 (0.63)	3.74 (0.74)	1.13
	課題・目的の存在	3.55 (0.67)	3.59 (0.81)	3.73 (0.63)	3.30 (0.89)	1.87
キャリア・アダプタビリティ	関心	2.58 (0.86)	3.18 (0.92)	3.41 (0.86)	2.68 (0.99)	8.47 ***
	コントロール	2.67 (0.90)	3.16 (0.82)	3.29 (0.88)	2.67 (0.94)	5.17 **
	好奇心	2.77 (0.81)	3.17 (0.73)	3.25 (0.81)	2.80 (1.06)	3.44 *
	自信	2.82 (0.71)	3.19 (0.78)	3.10 (0.69)	3.10 (0.98)	1.63

Note. ***p < .001, **p < .01, *p < .05

その結果、大学への適応感においては「被信頼感・受容感」において有意な主効果が見られた。そこで多重比較を行ったところ、勉学志向クラスターの学生は理由なしクラスターの学生に比べて有意に高い傾向であった ($p < .10$)。キャリア・アダプタビリティにおいては「関心」において有意な主効果が見られた。そこで多重比較を行ったところ、勉学志向クラスターの学生は受験ランク・正課外重視クラスターの学生と理由なしクラスターの学生に比べて有意に高かった (それぞれ $p < .001$, $p < .05$)。また、受験ランク以外クラスターの学生は受験ランク・正課外重視クラスターの学生に比べて有意に高かった ($p < .05$)。「コントロール」においても有意な主効果が見られたため多重比較を行った。その結果、勉学志向クラスターの学生は受験ランク・正課外重視クラスター学生と理由なしクラスター学生に比べて、有意に高かった (それぞれ $p < .01$, $p < .10$)。「好奇心」においても有意な主効果が見られたため多重比較を行った。その結果、勉学志向クラスターの学生は受験ランク・正課外重視クラスター学生に比べて有意に高かった ($p < .05$)。

考察

本研究の結果のまとめ

本研究では、大学への適応およびキャリア発達においてリスクを抱えている不登校傾向の高い生徒に対して、どのような支援が可能かを明らかにするための基礎研究として、大学進学理由が大学への適応およびキャリア・アダプタビリティに及ぼす影響を明らかにした。

その結果、大学進学理由は大学への適応感の一部を予測することが示された。特に、勉学志向の高さは大学への適応感を予測することから、大学の本来の機能である学問を修めるといった目的を持つことが、大学における居心地の良さや被信頼感・受容感を高めることが示された。しかし、同じ自律的な進路選択でも正課外を重視することは大学への適応感の高さを予測しなかったため、仮説は一部支持された。自律的な進路選択であれば大学への適応感が高まるのではなく、勉学という大学本来の機能を考慮した進路選択であることが、大学への適応感を高めることが示された。

一方、受験ランクの高さは大学への適応感を低めることを予測することから、進学先を決める際に「この大学ならば学力的に行ける」といった大学入学後を考えない現状のみ考慮したうえでの進路選択は、大学進学後は望ましくないことが示された。一方、同じ他律的な進路選択でも周囲の評価によって決定することは大学への適応感の低さを予測しなかったため、仮説は一部支持された。周囲の評価による決定は、他律的ではあるが世間一般の評価やキャンパスの雰囲気など、大学に通っている自分を想像した、将来をある程度見通した決定であるといえる。一方受験ランクによる決定は、入試の難易度

や自分の成績に合っていたからなど、大学に合格するという目先の決定であり、将来の見通しという視点に欠けている。この違いによって、大学進学後の適応感に違いが出たのだと考えられる。

同様の結果がキャリア・アダプタビリティでも見られた。勉強志向の高さはキャリア・アダプタビリティを高め、受験ランクによる決定はキャリア・アダプタビリティを低めていた。適応と同様、自律的で大学本来の機能を考慮した進路選択がキャリア意識を高め、他律的で将来の見通しに欠けた進路選択がキャリア意識を低めており、進路選択の理由は選択先への適応のみならず、その後のキャリア形成にも影響を与えていることが示された。

さらに、大学進学理由の個人差として、4つの特徴的なパターンが見られることが示された。受験ランクと正課外を重視するといった他律的な動機を持つパターン、受験ランク以外の動機を持つパターン、勉強志向が他の動機に比べても高いパターン、そして全ての動機が低いパターンである。勉強志向が他の動機に比べて高いパターンの学生が適応感においてもキャリア・アダプタビリティにおいても最も高く、次に受験ランク以外の動機を持つパターンが高く、理由なしと他律的な動機を持つパターンの学生が最も低かった。キャリア・アダプタビリティの「好奇心」においては、理由なしよりも他律的な動機を持つパターンの学生の方が低いことが示された。

以上の結果をまとめると、大学に進学するという進路決定の際、学問を修めたい、専門知識を習得したいといった大学本来の機能について自律的に考えた上で入学することが、大学における適応感およびキャリア発達を促すことが示された。しかし、現時点での学力や入試の難易度から進学を決定するといった、短慮的で将来を見通していない他律的な考えは、大学における適応感およびキャリア発達を阻害することが示された。

不登校傾向の高い者への支援における示唆

上述したとおり、不登校傾向の高い生徒は、大学進学を選択する際に学力を重視する特徴が示唆されている。つまり、不登校傾向の高い生徒は、大学における適応感及びキャリア発達を阻害する動機によって、大学進学を決定しかねないことが示されたといえよう。勉強志向的な動機を持つように支援することが最も効果的であると考えられるが、そもそも学力に不安を持つ不登校傾向の高い生徒に、勉強志向的な動機を持つように支援することは困難であると考えられる。しかし理由もなく大学に進学することも、大学における適応感およびキャリア発達を低めるため、何らかの理由をもって大学に進学する必要はある。受験ランク以外の動機を持っていれば、ある程度大学への適応感もキャリア発達もある程度高い。したがって、自律的な勉強志向的な動機を持つことができなくても、受験ランクといった学力を重視した動機を持つような支援を避けなければならないことが、本研究によって示唆された。受験ランクによる進路決定は、生徒の学力と

大学のランクといった客観的な数値のマッチングによって可能になるため、支援の取り掛かりとして容易に使用しやすいといえる。しかし、そのような進路選択によって大学進学が決定しても、その後の大学継続に困難をきたし、社会人に向けた適応的なキャリア形成につながりにくくなると考えられる。

今後、実際に不登校傾向の高い高校生が持ちやすい大学進学理由を明らかにし、さらにはその後の大学への適応感およびキャリア形成に及ぼす影響を明らかにしていく必要があるだろう。また、不登校傾向の高い高校生に受験ランクによる進路決定を避け、他の動機を持つことができるように支援することによって、その後の大学への適応感およびキャリア形成が促されるかを検討していく必要があるだろう。また、不登校傾向の高い生徒に対しては、学校、家庭、そして医療、福祉などの専門機関が連携し、一貫したサポートを提供することが有効であることが示されてきた。今後はこれらの連携に加え、高大の連携といった学校間の連携も視野に入れ、例えば高校卒業時に持っていた大学進学理由を大学側も把握することで、学生のその後の適応やキャリア意識の一貫した支援につなげていけると考えられる。

引用文献

- 測上 克義 (1984). 進学志望の意思決定過程に関する研究 *教育心理学研究*, 32, 59-63.
- 濱名 篤 (2005). 新入生の適応と不適応はどのような経験から生まれるか—学習面と対人関係を中心に— *大学教育学会誌*, 27, 31-36
- 五十嵐 敦・佐藤 公文 (2011). 高校生の大学進学動機の類型化とキャリア発達との関連について *福島大学総合教育研究センター紀要*, 10, 25-32.
- 五十嵐 哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 *教育心理学研究*, 59, 64-76.
- 伊藤 美奈子 (2006). 不登校の子の理解と援助 (8) 不登校の子どもたちの進路 *児童心理*, 60, 1559-1565.
- 伊藤 美奈子 (2015). 不登校経験者による不登校の意味付け: 不登校に関する不登校意味付け尺度項目の収集 *奈良女子大学心理臨床研究*, 2, 5-13.
- 栗山 直子・上市 秀雄・齊藤 貴浩・楠見 孝 (2001). 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 *教育心理学研究*, 49, 409-416.
- Low, K. D., Yoon, M., Roberts, B. W., & Rounds, J. (2005). The stability of vocational interests from early adolescence to middle adulthood: a quantitative review of longitudinal studies. *Psychological bulletin*, 131, 713-737.
- 牧野 幸志 (2001). 大学生の不登校に関する基礎的研究 (1) —大学生の不登校と退学希望の理由の探索— *高松大学紀要*, 36, 79-91.
- 松井 賢二 (2002). 中学生の不登校傾向意識: 学校ストレス, 進路 (キャリア) 成熟, 自己肯定感との関係から *新潟大学教育人間科学部紀要 人文・社会科学編*, 5, 251-258.
- 松井 美穂・笠井 孝久 (2012). 不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの *千葉大学教育学部研究紀要*, 60, 55-62.
- 三保 紀裕・清水 和秋 (2011). 大学進学理由と大学での学習観の測定: 尺度の構成を中心として *キャリア教育研究*, 29, 43-55.
- 文部科学省 (2006). *不登校に関する実態調査—平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書—*

文部科学省 (2012). 平成24年度学校基本調査

成田 絵吏・森田 美弥子 (2015). 高校生の進路選択における親のサポートについて—進路選択に関する自己効力と行動との関連から— *キャリア教育研究*, 33, 47-54.

Savickas, M. L. (1997). Career adaptability: An integrative construct for life - span, life - space theory. *The career development quarterly*, 45, 247-259.

杉本 英晴 (2014). キャリア・アダプタビリティ尺度の作成 *第56回日本教育心理学会総会発表論文集*, 316.

鈴木 規夫・柳井 晴夫 (1993). 因果関係モデルによる高校生の進路意識の分析 *教育心理学研究*, 41, 324-331.

田山 淳 (2008). 中学生における登校行動とバウムテストの関連について *心身医学*, 48, 1033-1041.

八木 晶子・齊藤 貴浩・牟田 博光 (2000). 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 *進路指導研究*, 20, 1-8.

山本 寛 (1994). 勤労者のキャリア意識とキャリア上の決定・行動との関係についての研究 *経営行動科学*, 9, 1-11.

吉中 淳 (1994). 高校生の進路選択における計画性を規定する要因の分析的研究: 四年制大学進学希望者を対象に *進路指導研究*, 15, 20-29.